

大阪教育大学

聴覚障害学生の附属小学校での教育実習について

1 本学における障害学生受け入れのための全学的な対応

1981年「障害者受け入れ懇談会」の開催（それ以前は個別対応の要望書）→聴覚障害学生：手話通訳、ノートテイカーの派遣
1995年「聴覚障害学生と共に手話を学ぶ会」の要望書→教員への講義での要望

聴覚障害学生の支援は学生の自主的な活動が学生課・教務課と連携して、・・・。

2 附属小学校での教育実習

これまで、聴覚障害学生の小学校での教育実習は、複数の難聴学級が設置されたセンター校で実施されていた。
実習学生 障害児教育教員養成課程3回生1名 実習校等 附属〇〇小学校第1学年（4週間）
支援状況 実習2週目からは、全日、手話通訳かノートテイクを一人つけてもらった。

※よかったこと

- ・児童とのコミュニケーションが徐々にスムーズになった。
- ・分からない時、児童がゆっくりと話してくれた。

※困ったこと

- ・実習開始1週間はコミュニケーションがとれなかった。
- ・初めの頃は、聴覚障害について理解してもらえなかった。

※授業について

- ・通訳者には待機してもらった。（実習生は自分で考えて授業を展開するので、最後まで通訳者には頼らず、児童と直接やり取りした。）
- ・掲示物をより多く作成して、分かりやすい工夫をした。
- ・児童との間でルールを決めた。（質問がある時には手をあげる。実習生が児童の発言を繰り返して、児童自身にも発言内容の確認をしてもらう。）

※通訳について

- ・小学校では先生と児童のやり取りが多いので、児童の発言を全部通訳することは難しい。
- ・通訳者はふたり必要だと思った。通訳者の配置は一人が被通訳者の隣、もう一人が被通訳者と児童をはさんで向き合う形であると、よりよい情報保障ができたと思う。
- ・通訳の役割（先生が児童に話している内容、先生と児童とのやり取りの状況、打ち合わせや連絡会と内容等）

※心掛けたこと

- ・分からないことをそのままにするのではなく、分かるまで何度でも聞く。
- ・児童と関わる時には、通訳者には頼らずに、直接関わるように積極的に行動する。
- ・一度に大勢の児童に話し掛けられると分からないので、児童には順番に話してもらうように、お願いした。

問い合わせ先

大阪教育大学教育学部特別支援教育講座井坂研究室（TEL：072-928-3484, e-mail：isaka@cc.osaka-kyoiku.ac.jp）
同教育学部障害児教育教員養成課程3回生森本朱香